
救世主と死神|(仮)

三流の書き手

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

救世主と死神―（仮）

【Nコード】

N2133W

【作者名】

三流の書き手

【あらすじ】

アンコクダーとの戦いから六年、高校生になった戦部ワタルのもとに、創界山の危機が知らされる。創界山とトモダチを救うため、再び救世主となり、神部界の地を踏むワタル。だが、新たな侵略者は魔界の者ではなかった？ 白い仮面を付けた異形の化け物に立ち向かうワタル。そして、空間の亀裂を抜けた先に待っていたのは、黒い着物を纏った戦士たちとの、あり得ない出会いだった。オレンジ色の髪の死神代行と、救世主が出会うとき、新たな英雄伝が幕を開く。

主要登場人物の設定（前書き）

初めまして、三流の書き手と申します。世代の違うこの二つの作品のクロスオーバーを試みてみました。文才無し、亀更新の上、行き当たりばったりの作品になりますが、時間と興味のある方はお付き合います。

主要登場人物の設定

主要登場人物

名前 いくさべ 戦部 ワタル

年齢 16歳 高校一年

小学生時代、伝説の救世主として幾度も、神部界の危機を救う。

—（小説を含む）

今回は、創界山に現れた白い仮面をつけ、体^{ホロウ}に穴の空いた化け物（虚）と戦う為に、再び神部界の土を踏む。

所持アイテム 登龍剣 ヘン玉 フリフリー（回転龍円盤）

名前 龍神丸

ワタルが搭乗する魔神。性能、外見は『超魔神英雄伝ワタル』の設定と同じ。超力変身が可能。ただし、通常形態でも、炎龍拳、龍雷拳が使用出来る。

名前 黒崎 一護

年齢 16歳

オレンジの髪と眉間のシワが特徴の、高校生兼死神代行。藍染の反乱終結から数週間後、突如、尸魂界に出没するようになった、背中にコウモリのような翼を持つ紫色の化け物と、強固な鎧に身を包む巨大な怪物を倒すため、仲間たちと共に尸魂界に来ている。—（

この小説の設定では、死神の力は失っていません)

主要登場人物の設定（後書き）

以上、原作と明らかに設定異なる登場人物一（？）の紹介でした。追記として、本作の主人公、ワタルの能力を底上げして、剣での戦闘力はBLEACH基準で副隊長レベルにします。瞬歩は出来ませんが、瞬歩には反応できるものとします。

上記以外のことについては、一部を除いてほぼ原作通りになるように心がけますが、作者の記憶と解釈基準となりますので、矛盾、勘違い等がありましたら、ご指摘ください。

プロローグ（前書き）

とりあえず、序章を投稿しました。ワタルサイドの話なので、若い方は分からないかもしれませんが、取り敢えず読んでください。

プロローグ

年越しを一週間後に控えた龍神町は、前日の夜中から降り始めた雪によって白銀に染まっていた。

そんな一晩で様変わりした町を二階の自室から眺めている少年がいた。

名前を戦部ワタル。六年前、異世界である神部界の創界山、星界山を魔界の者達から取り戻した救世主の成長した姿が、そこにあった。

ワタル「雪か……」

殊勝にも冬休みの課題を広げた机に向かい合っていたワタルだったが、顔は雪の降り頻る窓の外に向けられ、意識は遥か遠くの場所に向けられていた。

ワタル「みんな、どうしてるかな……」

そう呟くワタルの脳裏に浮かぶのは、クラスメイトの顔ではなく、異世界、神部界にいるかけがえのない友人たちの顔だった。

アンコクダーとの闘い以降、魔界の者が神部界に侵攻してくることなく、ワタルが救世主として呼ばれることは無かった。ただし、この六年間、一度も神部界に行かなかったわけではない。

創界山の王宮、聖龍殿の宝物殿から秘宝『天女の像』が無くなった、天女の像盗難事件を筆頭に、何らかのトラブルが起きると、そ

の度にワタルは神部界に呼び出され、トラブルの解決に尽力したものだ。

今、思えばそのほとんどは、ワタルを神部界に呼ぶための口実だったような気がする。ともかくそのような理由で、ワタルは一年に二、三回は神部界に行っているので、懐かしいという感情はなかった。

それでも大切な友人たちと何時でも会えないという事実は寂しいもので、ワタルがボケ〜としている時は、大概、神部界に思いをはせていた。

??? 『ワタル!!』

ワタル「え？」

不意にワタルの脳裏に声が響く。突然のことに思わず部屋の中を見渡すが、当然、部屋の中には誰もいない。しかし、ワタルには脳裏に響いたこの声に、聞き覚えがあった。いや、確実に知っていた。それは友人と言うよりも、自身の半身とも言うべき存在の声だった。

??? 『私の声が聞こえるか、ワタル!!』

ワタル「りゅ、龍神丸なの？」

かつて、創界山や星界山で共に強大な敵と闘った半身の声の主の名を呼ぶ。だが、久しぶりに半身の声を聞いても、ワタルに喜びはない。切羽詰まった龍神丸の声がそれを許さず、ワタルの心に救世主の鎧を纏わせる。

ワタル「どうしたの、龍神丸？何があったの！」

龍神丸『ワタル、再び創界山に危機が訪れた!』

ワタル「え!？」

龍神丸『救世主の力が必要だ。私と一緒に創界山に来てくれ!』

最後の戦いから六年。考えた事は一度ではなかった。神部界の平和はいつまでも続くのだろうと。そして、遂に平和は破られた。

ワタル「……僕が必要なんだね」

拳を固く握りしめながら、静に、強く問い掛ける。

龍神丸『そうだ、来てくれるか?』

この問いに拒絶の言葉など必要ない。

ワタル「当たり前だろ! なんとって僕は、救世主ワタルなんだから!」

龍神丸『それでこそワタルだ! 私は龍神池にいる、すぐ来てくれ!』

ワタル「分かった!」

ワタルは机の上に置いてあったスマートフォンをズボンのポケットにねじ込み、上着を掴みとると母親に出掛けてくる旨を伝え、返事も待たずに家から飛び出した。

目指すは龍神池のある龍神山。

三十分後、ワタルは龍神山の山頂にある龍神池にかかる橋の上にいた。

自慢のローラーブレードであれば、もっと速く着いたのだが、路上に積もった雪のせいでそれが使えず、龍神池に着いたワタルは真冬ながら、汗だくになっていた。

ワタル「は、はっきり言って、しんどいぜ……」

それでも息を整え、目に見えない剣を掲げるように両手を上げて叫ぶ。

ワタル「りゅううううじんまるうううう!!!!!!」

その叫びに答え、龍神池が輝き始め、光る池の中から金色の龍が姿を現した。

龍神丸『来たか、ワタル』

金色の龍、龍神丸はワタルの目の前に頭を下ろした。

龍神丸『さあ、乗れ』

促されるままに龍神丸の頭に乗ったワタルは、目を閉じ、大きく息をはいて左右の角をそれぞれの手で強く握った。そして、目を開く。そこには強い意思だけが宿っていた。

ワタル「行こう、創界山に！」

龍神丸『おう!!』

ワタルを頭上に乗せた龍神丸は、一旦上昇すると、勢いをつけて光る池に飛び込んでいった。

こうして救世主は再び戦いの為に創界山に向かう。その先にある、出合いと激闘の存在に気付かないまま

プロローグ（後書き）

稚拙な文章で読みづらかったでしょうが、最後までお読みいただきありがとうございます。次の話もなるべく早く投稿するつもりなので、時間と興味のある方はお付き合い下さい。なお、次話もワタルサイドの話なので、ブリーチファンの方はもうしばらく、お待ちください。

最後に、誤字、脱字のご指摘、感想をお待ちしております。では、次の話でお会いしましょう。

救世主と仮面の怪物（前書き）

遅くなりました。1話目、投稿します。

ワタルの性格が大人しい気がします。時間と興味がある方はご覧ください

救世主と仮面の怪物

龍神丸に乗り、光り輝く龍神池に飛び込んだワタルは、上や下といった区別のない不思議な空間を飛んでいた。遠くにいくつもの小さな輝きが見えるところはまるで宇宙空間を飛んでいるようだった。かつて龍神丸に聞いたところ、ここはあらゆる世界の狭間の空間であり、小さな輝きの一つ一つがワタルたちが住む世界とは異なる世界だということだった。しかし、その異なる世界に行くには、ただ輝きに向かって真っ直ぐ進むだけでは駄目らしく、その世界に通じる路を通らなければ行けないようで、龍神丸も神部界と現生界を結ぶ路は知っていても、それ以外の世界にいく路は知らなかった。

龍神丸『ワタル！』

一つの輝きが一つの世界、そんな宇宙^{宇宙}よりも遙かにスケールの大きな光景に心を奪われていたワタルは、龍神丸の声で我にかえった。

龍神丸『もうすぐ神部界だ。心の準備はいいか！？』

ワタル「う、うん。覚悟はできてる。（そうだ、遊びに来たんじゃない、神部界を守るため、戦いに来なんだ！）」

浮わついていた心を、自ら喝を入れたワタルの目は、平凡な高校生^生のそれから、幾多の戦いを潜り抜けてきた歴戦の戦士の目になった。

その事を気配で察した龍神丸の瞳が光った。

龍神丸『ならば、これを纏え』

同時にワタルの体が金色の光球に包まれた。そして、その光が消えると、中から黄色い逆三角形の飾りの付いた青い鎧を纏い、背中に長剣を背負ったワタルの姿が現れた。

ワタル「アンコクダーとの戦いが終わってから、神部界には何度も行ったけど、この格好になるのは、六年ぶりになるな……」

龍神丸『やはり、ワタルにはその勇者の装束がよく似合うな』

ワタル「ありがとう、龍神丸（似合うのはいいけど、高校生でこの格好は、はつきり言って、ちょっと恥ずかしいな）」

ワタルもお洒落にはそれなりに気を使う年頃になっていた。

龍神丸『さあ、神部界につくぞ！』

我に変えると、すぐ目の前には異世界へ入口である、輝きが迫っていた。

輝きを抜けたワタルと龍神丸が飛び出たのは、龍神池と同じくらいの広さの池だった。ワタルたちはそのまま上空に舞い上がった。

ワタル「そういえば龍神丸、聞くの忘れてたけど、神部界に何があったの？ また、魔界の者が攻めてきたの？」

神部界の危機と言えば魔界の者。というのは、やや単純な考えであるが、そもそも魔界の者から神部界を救うのが救世主の役目なのだから、魔界の者の関与を疑うのは仕方ないことだった。しかし、今回はいつもとは違うようだった。

龍神丸『それが、よく分からぬのだ』

ワタル「分からないって、どういこと？」

龍神丸『魔物には違いないが、魔界の気配が感じられないのだ』

ワタル「それって、一体……？」

龍神丸『ワタル、下を見ろ！』

言われるままに視線を下に向けた。ワタルの経験によれば、そこにはモンジャ村ののかな光景が広がっているはずだった。だが、

ワタル「な、なんだ、あいつらは！？」

ワタルの目に写ったのは、モンジャ村を我が物顔で闊歩し、民家を壊し、田畑を荒らす、ドクロのような白い仮面を被った怪物達だった。

ワタル「龍神丸、あいつらがさっき言ってた……」

龍神丸『そうだ、やつらが新たな侵略者だ！』

確かに今まで見てきた魔界の者たちとは雰囲気違った。眼下には四体ほどいるが、同じ姿をしているものはなく、二足歩行をしているものもいれば、三対の足とトカゲのような尻尾を持つものもある。大きさもバラバラで、小さいもので人間大、大きいもので四メートルと魔神サイズのものもいた。共通点は頭部に付いている白い仮面と、体のどこか、おもに胸や腹に穴が開いていることだった。

ワタル「なんなんだ、あいつらは!？」

様々な経験をしてきたワタルも、体の中央部に穴が開いても平気な敵など、さすがに遭遇したことはなかった。

そんなワタルの疑問をよそに、二メートルほどのサイズの怪物が逃げ遅れた村人に触手のような腕を降り下ろそうとしていた。

ワタル「やめろおおお！」

考えるよりも早く、ワタルの体は龍神丸から飛び降りていた。

背中の登龍剣を抜くと、落下の勢いのまま怪物の仮面ごと頭部を縦に一刀両断した。

「グオオオオオオ！」

頭部を割られた怪物は黒い霧が拡散するように消えていった。

ワタル「早く、逃げて！」

村人「あ、ありがとうございます、救世主様」

律儀に礼を言うと、村人は転がるように逃げていった。

その姿を確認した、ワタルは改めて残った三体の怪物に対して剣を構えた。

ワタル「さあ、来い！」

逃げ惑う獲物ではなく、立ちはだかる敵の突然の登場に戸惑う怪物だったが、三体のうち二体、三対の足を持つものと、ゴリラの様な長い腕を持つものが猛然と襲いかかってきた。

ワタル「へんたま、ブルー！」

それに対して、ワタルは赤と青の勾玉をくつつけたようなボールを取り出すと、ゴリラの様な怪物に投げ付けた。ボールは青く光ると加速していき、勢いよく怪物にぶつかる。怪物の体格だと、野球の硬式球程度が当たってもなんともないはずだが、怪物はまるで大型トラックに衝突されたように吹っ飛ぶと、やはり黒い霧のようになって消えていった。それとほぼ時を同じくして、ワタルは六本足の怪物の突進をかわすと同時に登龍剣を怪物の胴体に降り下ろしていた。

霧散する怪物を尻目に、ワタルは全長四メートル近くある怪物と向かい合う。さすがに生身ではかなわないので、龍神丸を呼ぼうと登龍剣を頭上に掲げようとした、その時、

???『デビルタイガーマサイル!!』

少年の声と共に上空から数発のミサイルが怪物に降り注ぐ。ワタルは咄嗟に伏せて爆風を避ける。一方の怪物は四方に爆発が起こり、棒立ちになる。そこに胴体部分に虎の頭を持つ、黄色と黒の魔神が飛来し、一刀のもと怪物を真っ二つに両断した。

ワタル「まったく、無茶するなあ」

非難めいた言葉を口にするが、声はとても嬉しそうだった。

怪物を倒した虎の魔神が膝まづくき、その中から操縦者と思われるワタルと同年齢くらいの金髪の少年が姿を現した。

ワタル「虎王！」

虎王「ワタル！」

絶対の信頼と親愛を込められてワタルは少年の名を呼ぶ。金髪の少年もワタルと同じ思いを込めた瞳を向けて、駆け寄ってくる。

虎王「金竜の、龍神丸の姿が見えたから、慌てて来てみたんだが、やっぱりワタルだったか」

そう言って笑う虎王も、六年の時を経てあどけなさを残しつつも、たくましく成長していた。しかし、子供の頃を知っているワタルには、その笑顔が新しい悪戯を思い付いたわんぱく小僧のように見えた。

ワタル「虎王は変わらないな」

脈絡もなくそんなことを口にする。

虎王「なに言ってるんだ？夏に会ったばかりなんだから、そんなに変わるわけないだろ」

言われた方は、ワタルの感慨には気付かず、首を傾げるだけだった。因みに夏休みにワタルが創界山に呼ばれたのは、亡くなった聖龍妃の跡を継いで創界山の王になった翔龍子改め、翔龍王に大將軍に任命された虎王の副官、ドン・ゴロこと武宝が夏風邪をひいて寝込んでしまったので、その代わりに副官代理に任命されたためである。代理と言ってもとくに仕事があるわけでもなく、虎王、翔龍王、ヒミコの四人で聖龍殿の一室に集まっては、昔話に花を咲かせた。そこにシバラクやクラマも加わり、充実した夏休みを過ごした。

ワタル「そうだったね、変なこと言ってごめん」

誤魔化すように苦笑いを浮かべたが、すぐに真剣な面持ちになった。

ワタル「それより虎王、あいつらは一体なんなんだ？」

虎王「それは俺様にも分からない。五日ほど前から現れるようになった。一体一体はそれほど強くないが、一度に現れる数が多くて、退治するのが大変なんだ」

ワタル「やっぱり、魔界の者？」

虎王「いや、それはない。魔界の者なら俺様が気配で分かる。やつらからは、それが感じられない」

元魔界皇子の虎王がそういうのなら間違いはないのだろうが、これであの怪物の謎が更に深まることになった。ワタル的には手近なところで魔界の者の仕業の方が、話が早くていいのだが。

虎王「一旦、聖龍殿に戻ろう。情報を集めている翔龍子が何か掴んでいるかもしれん」

ワタル「分かった、でも怪物の退治はいいの？」

虎王「今回、現れたのは、だいたい片付けた。後は、シバラクとクラマに任せておけば大丈夫だ」

シバラクやクラマにも会いたかったが、今は個人的な欲求を優先させていい状況ではなかった。

虎王「邪虎丸の背中に乗れ、ワタル。一気に聖龍殿に行くぞ！」

ワタル「分かった」

二人は魔神、邪虎丸に向かって走り出した。

虎王『……ワタル』

創界山の頂上、聖龍殿のある第7界層へ向かう虎型に変型した邪虎丸の背中、ワタルは虎王の、明快な彼らしくない戸惑いの含まれた声を聞いた。

ワタル「どうしたの、虎王？」

虎王『俺様は今回の件、ワタルには関わってほしくなかった』

ワタル「虎王……」

思いもよらない言葉に、ワタルは言葉をなくした。

虎王『ワタルには、救世主ワタルとしてではなく、俺様の友達、戦部ワタルとしてだけ、神部界に来てほしいんだ！』

自分の無力さを責めるように吐き出された言葉で、ワタルは分かった。虎王は自分に戦ってほしくない、傷付いて欲しくないのだ。虎王は分かっている。ワタルが、現生界では救世主ではなく、

どこにでもいるただの人間であることを。そんな少年を自分たち神部界の者が戦いに巻き込んでしまったことを。だからこそ、これ以上、ワタルに頼るべきではないと。

そんな虎王の心遣いが、ワタルは嬉しかった。だけど、

ワタル「ねえ、虎王」

邪虎丸のコクピットのなかで、恐らくは不甲斐ない自分自身を殴りたいほど悔しい思いをしているだろう虎王に、語るように話しかける。

ワタル「もし、僕がものすごく困っているときに、その事を迷惑をかけたくないからって、虎王に相談も連絡もしなかったら、虎王はどうする？」

虎王『……怒る。何も言ってくれないワタルに』

ワタル「何で？僕は虎王に迷惑をかけないようにしたんだよ」

虎王『俺様とワタルは友達だ。友達同士で遠慮なんかして欲しくない。それは力を貸すほうも借りるほうも同じだ』

ワタル「それと同じだよ虎王。困っているのなら、遠慮なんかしないで、来てくれワタル！、って言って欲しい」

ワタル「それに、いつか言ったことがなかったかな？僕は自分を救世主だなんて思ったことは一度もないよ。僕はただ、一生懸命生きている人たちを助けたいだけなんだよ。救世主だからじゃない、僕がそうしたいんだ」

その言葉に虎王は自分が勘違いしていたことに気付いた。ワタルは救世主の宿命に囚われているわけではないことに。

ワタル「それに、はっきり言って翔龍王はともかく、虎王は僕がついていないと、心配だからね」

おどけたように言いながら、拳で鼻の下をこすった。それはすでに直した小学生の頃の癖だった。

その姿に出会ったばかりの頃のワタルの姿を重ね合わせ、そしてないかが吹っ切れたように頬が緩んだ。

虎王『言ったな、そんなことを言うやつはこうだ!』

虎王は邪虎丸のスピードを上げながら上昇、さらに捻りまで加えた。そうなると邪虎丸の背中に乗っているだけのワタルはたまったものではない。

ワタル「ちよっ、と、虎王? 待つて待つて待つて! 落ちる落ちる落ちるうううううう! どひやあああああああ! ! ! !」

こうして創界山の空に、救世主の絶叫が響くのだった。

ワタル「ち、ちびるかと思ったことは」

究極の絶叫マシン（安全装置なし）を強制体感しながらも、なんとか無事に聖龍殿にたどり着いたワタルだったが、膝が爆笑して、しばらく歩くことができなかった。

ワタル「虎王、さすがにあれは酷いよ」

虎王「いや、すまんすまん。俺様としたことがつい調子に乗ってしまった」

ようやく歩けるようになったワタルを引き連れ聖龍殿の廊下を颯爽と歩く虎王は、一応は謝罪したが、満面の笑みを浮かべているところを見ると、反省はしていないのだろう。

虎王「翔龍子、入るぞ」

広い聖龍殿のなかを長い距離、歩き続けた二人はある部屋の前まで来ると、虎王はノックもせず扉を開いた。

翔龍王「虎王、どうした？」

中にいたのは龍の金冠を金色の頭の上に置き、緑色の衣を纏った虎王そっくりの少年だった。

虎王「翔龍子、ワタルが来てくれたぞ」

ワタル「翔龍王、夏以来だね」

翔龍王「ワタル、来てくれたのか！」

ワタルと翔龍王は歩み寄って、互いの手を強く握った。

翔龍王「ワタル、すまないがまた力を貸してくれるか？」

ワタル「そのために来たんだよ」

ワタルはニコリと笑い、翔龍王は虎王に比べると線の細い顔に微笑みを浮かべた。

虎王「それで、やつらのことで何か分かったことはあるか？」

翔龍王「いや、正体、目的、共に不明のままだ。だが、やつらの出現場所が集中していることが分かった。それがここだ」

卓の上に広げてあった地図の一ヶ所を、翔龍王の指が指し示した。

虎王「ここは……、モンジャ村からずっと東にある森の中にだな」

ワタル「ここに何かあるの？」

虎王「そんな話は聞いたことが無い」

翔龍王「これまでは無かったが、今は何かあるのかもしれない」

ワタル「そうになると、直接この森に調べにいった方がいいね」

虎王「よし、それなら今から調べにくぞ」

大將軍の地位にある虎王としては、このような見落としが許せず
はすもなく、

言うが早いワタルの腕を掴むとドカドカと部屋から出ていった。

翔龍王「虎王、念のための武宝たちも連れていけ！」

虎王「分かった」

返事をしながら走り去る虎王とワタルだった。結果だけ言えばワタルたちと、部下の兵士五人を連れた武宝は合流した。件の森にワタルたちが到着した三十分後のことだった。

八人が二人一組になって森の中を探索すると、意外なほどあっさり
とそれらしきものは発見できた。だが、

武宝「これはなんでしょうか、虎王様」

虎王の副官にして、お目付け役である赤い衣服の大柄の男性、鈍
武宝の言葉は、残りの七人の七人の心情を代弁したものだだった。

ワタル、虎王組が見付けたものは、一言で言えば穴だった。それが
地面や岩壁にあったのならなんの問題も無かった。しかし、その
穴は何もない空間に開いていたのだった。

虎王「何と言われてもな……、ワタルは分かるか？」

ワタル「え？僕も分かんないよ。こんなの創界山でも、星界山でも見たことないよ」

穴の大きさは高さ約 2メートル、幅は1メートル弱ほど。形は円形でなく、ガラスが割れたときにできるようなイビツな多角形をしている。

武宝「ここからあの怪物がでえるのでしょうか？」

ワタル「そう考えるのが妥当だと思います」

現状ではそれ以外に可能性はない。

虎王「そうなら、この穴を塞げばやつら出てこれなくなるな。それで問題解決だ」

武宝「しかし、どのように塞ぎますか？岩等をおいてもすぐに壊されるでしょうし」

ワタル「うん、それに他の場所に穴を開けれないとも限らないしね」

虎王「それならどうするんだ？」

自分おアイディアを否定されて、ちよつとご機嫌斜めになる虎王。

ワタル「まずはこの穴の先に何があるのか調べないと。少なくともこの穴がこちらから開いたものでないのは確かだから」

虎王「よし、俺様とワタルが調べてこよう」

ワタル「それはダメだよ」

武宝「お止めください、虎王様！」

即決する虎王を間髪入れずに二人が止めるた。

虎王「何故だ！何故、俺様とワタルではダメなのだ！？」

武宝「危険です。虎王様に万が一のことがあれば、どうされます！」

ワタル「それに虎王は大將軍でしょ、創界山を留守にするのは不味いし、怪物がここから出てきた時に、すぐに対応できるよう兵を配置したりしないといけないじゃないか」

虎王「む！」

皇子時代とは違い虎王も責任ある立場の人間である。その事を指摘されれば奔放過ぎる性格の虎王も反論できなかった。

虎王「それなら調べるのはどうするんだ？」

ワタル「それなら僕が一人で行って来るよ」

武宝「ワタル殿！」

虎王「それは無いぞ、ワタル！」

当然、反対の声が上がるが、ワタルは手をあげてそれを制した。

ワタル「大丈夫、ちょっと調べて来るだけだから。なにかあればす

ぐに戻って来るよ」

神部界を数回も救った救世主の言葉には説得力があり、それ以上の反論は無かった。

虎王「分かった、ここはワタルに任す」

ワタル「うん、任された」

虎王「だが、危険だと思ったらすぐに戻って来いよ。それまでに調査隊を組織しておく」

ワタル「分かった、無茶はしないよ。でも、虎王が僕の無茶を止めるなんて、昔と立場が逆になったね」

虎王「ふん、できれば俺様も、ワタルと一緒に無茶をしたいさ。ワタル、もう一度言うが、」

ワタル「うん、無茶はしない、約束だ。それじゃ、行ってくる」

ワタルは虎王と数秒、見詰め合うと、穴の中に入っていくた。

その先に新たな激闘と、新たな出会いがあることを知らずに。

救世主と仮面の怪物（後書き）

早くブリーチ世界に入りたかったので、後半は少し飛ばしていき
ました。次話からブリーチのキャラが出てきますが、黒崎一護の出
番は次の次くらいになるかもしれません。
次話もよろしくお願いいたします。

そこにいたのは猫だった（前書き）

いろいろ忙しくて、一か月ぶりの投稿になりました。話が予定よりも長くなってしまったので、一護はまだ出てきません。時間と興味がある方はご覧ください。

そこにいたのは猫だった

モンジャ村の東の森の中で見付けた空間に出来た不思議な穴。その穴の調査のために中に入ったワタルは、警戒しながらも着実に奥に進んでいた。

ワタル「うへへ、気持ち悪いな」

てつきり中は洞窟のようになっていると思ったが、両側は雲が流れ落ちるような壁が続いた。ただ、幻想的と言い難く、不気味なだけだった。

ワタル「一人で来るんじゃないかな……」

虎王を連れて来なかったことを、軽く後悔し始めた時、足元から地響きのようなものを感じた。

ワタル「なんだ？」

どうやら後ろから響いてくるようで、足を止めて振り返る。さらに地響き以外の音も聞こえてきた。なにか巨大なものが近付いて来るようだった。

ワタル「ヤバイ！」

何が近付いて来るのか分からないが、神部界の戦いで磨かれた直感が危機を知らせ、ワタルはその直感に従って走り出した。不意に薄暗いはずの空間が、ワタルの回りだけ明るくなる。

ワタル「え？」

突然のことに肩越しに後ろを見ると、雲の列車としか表現できないものが、ライトのようなものでワタルを照らしながら猛スピードで突進してきた。

ワタル「どひゃあああああああ！」

予想外の物体の出現にワタルは情けない悲鳴を上げながら全力疾走で逃げるが、雲の列車はかなり早くどんどん迫ってくる。

ワタル「このままじゃ……って、そうだ！」

勇者の装束に付いているギミックの一つを思いだし、ちょっとジャンプすると、左右の踵を二回、打ち合わす。すると靴底にローラーブレードが現れた。ワタルは危なげなく、と言うよりもかなり上手く扱い、文字通り滑るように疾走した。

ワタル（昔はローラースケートだったはずだけどな……）

神部界のこんな変化に感慨を覚えつつもワタルはスピードを上げていく。それでも雲の列車との距離は広がることなく、じわりじわりと詰まっていく。

ワタル「このままじゃ、追い付かれる」

焦るワタルの前方に光が現れた。出口の確証はないが、とりあえずあそこを目指すしかない。疲れてきた体に鞭をうち、足に力を込める。

目の前の光が大きくなっていくのに比例して、後の雲の列車との

距離も縮まってくる。

ワタル「こんなところで」

脳裏に神部界で待つ友達の顔が浮かんた。

ワタル「終わってたまるかあああ！」

目の前にまで迫っていた光の中に飛び込むワタル。助かった、と歓喜に輝く目に写ったのは……………目前に迫る一本の木だった。

ゴンッ！

鈍い音が響くのと同時に、森の中の一本の木が揺れ、枝にとまって鳥が飛び立っていった。

ワタル「い、痛い……」

可能な限りのスピードで走っていたワタルに、目の前に現れた木を避けることなどできるはずもなく、賞賛を贈りたくなるほど見事に、木に激突していた。

ワタル「こんなところに生えるなよな」

理不尽なことを言い、赤くなった鼻を擦りながら立ち上がるワタルは、今さらのように雲の列車のことを思い出して慌てて後ろを見るが、そこにはたった今、ワタルが飛び出してきたであろう空間に開いた穴はあったが、そこからあの雲の列車が出てくることはなかった。

ワタル「た、助かった」

ほっと安堵の息をついたワタルは、改めて辺りを見渡す。そこは森の中で、一瞬、神部界に戻ってきたのかと思ったが、それなら今頃、虎王が今のワタルの災難を見て、抱腹絶倒して大笑いしているはずだが、虎王はおろか、武宝や五人の兵士たちの姿も見えない。どこかは分らないが、元の場所に出てきたのではないことは確かなようだ。

ワタル「ここはどこだろう」

あの怪物がいるようなところだから地獄のようなところかと思っただが、そんな物騒な感じはしないごく普通な森の中のようなだった。

一旦、虎王たちの所に戻ろうかと思ったが、最低限、ここから怪物たちが来ている確証は欲しかったし、帰りもまたあの雲の列車に追いかけられるのかと思うと、少し気が引けた。

ワタル「もう少し、この辺を調べてみるか」

どのみち戻るにはもう一度、あの不気味な道を通らなければならぬのだし、もう少しここの情報を集めようとワタルは歩きだした。

ワタル「やっぱり、こんなところじゃなんも見つからないか」

あの穴の場所を見失いように慎重に散策を始めたワタルだが、森の中ということもあって、少し歩いただけでは何の手がかりも見つからない。

ワタル「もう少し行動範囲を広げようか」

穴の位置を見失う可能性はあったが、消極的になりすぎても意味はない。穴の場所を忘れないように慎重に森の奥へと進んでいた。

ガサッ

探索を続けるワタルのすぐそばの茂みで、何かが動く音がした。

ワタル「な、なんだ？」

ちよつとびびりながらその茂みに近付き、恐る恐る覗こうとした時、

バッ

茂みから小さな影が飛びしてきた。

ワタル「わっ！」

仰け反りながら思わずその影を両手で掴んだ。

猫「ニャー」

幽霊の正体見たり枯れ尾花、茂みから飛び出してきたのは何てこととは、ただの黒猫だった。

ワタル「お、脅かすなよ」

黒猫「ニャー」

ヘナヘナと座り込むワタルの手の中で黒猫が鳴いた。何故か馬鹿にされたような気がしたが、猫相手に八つ当たりしてもしょうがないので降ろしてやると、ポンポンと軽く頭を叩いた。

ワタル「ホラ、行きなよ」

黒猫「ニャーン」

黒猫は軽やかに身を翻すと、馴れた様子で近くの木を駆け上るとまた鳴いた。今度は気を付けろと言われた気がしたが、気のせいということにした。

ガサガサッ

再び茂みが揺れる。明らかに先ほどより大きく揺れているが、緊張が緩んだワタルはその違いに気付かないまま、無用心に茂みに近づいた。

ワタル「お前の仲間かい？」

枝の上で黒猫が首を横に降る。否定しているのではなく、ワタルの今ののんきな言動にあきれているようだった。

茂みを掻き分けると、そこにいたのは猫、ではなく白い仮面だった。

ワタル「……」

怪物『……』

束の間の見合い。先に動いたのは地を這う仮面の怪物だった。

怪物『ガァァァ!』

鋭い爪の付いた前肢がワタルの頭部を襲った。

ワタルは咄嗟に左足を軸に体を回転させ側面に回り込む。その動作をしながら、背中の登龍剣を抜くと同時に降り下ろした。登龍剣は怪物の胴を両断し、神部界の時と同様、黒い霧となって霧散した。

その様子を枝の上で眺めていた黒猫の顔が、ワタルの動きに感心したような表情になった。そして、その後のワタルの言葉に眼光を鋭く光らせた。

ワタル「やっぱり、こいつらはここから創界山に来ていたのか」

ようやくこんな所まで来た甲斐があったと言えるだけの収穫があった。取り敢えず、この事を虎王たちに伝えるため、ワタルは一旦、戻ることにした。

黒猫「ニャーン」

後ろから鳴き声に聞こえて来たので振り返ってみると、いつの間にかあの黒猫が枝から降りて来ており、お座りをしてこちらを見ている。

ワタル「僕はもう帰るから、君も帰りなよ」

通じるはずもないが、一応そう言っているとワタルは穴のある方へ歩き始めた。

ワタル「ん?」

少し歩いてから肩越しに後ろを見ると、黒猫が付いてきていた。なつかれたのかな、と思ったが、どうせあの穴の仲間では付いて来ないだろうし、仮に付いてきたとしても、たかが猫一匹、大きな問題になることはないだろうと判断し、黒猫のことは放っておくことにした。後でワタルは思う。運命の分かれ道って言うのは、意外に些細なことなんだな、と。

黒猫を連れたまま穴の場所まで戻ってきたワタルは、穴が閉じることなく元の場所にあったことに少しホッとした。どうやって出来たのか分からない穴だ。不意に閉じて消えても不思議はない。

??? 「なるほどのう、ここに集まっていた虚共は、この穿界門に入っておったから、姿が見えなかったのか」
ホロウ

不意に聞こえてきた人の声に、ワタルは慌てて登龍剣を掴みながら辺りを見渡す。声の感じからして大人の男性のようだったが、近くにそれらしき人影は何処にもない。

??? 「どこを見ておる、ここじゃ、ここじゃ」

再び嘲るような声がワタルに掛けられる。

ワタル 「どこだ！どこにいる！？姿を現せ！」

??? 「やれやれ、こう言わんと分からんか？……ニャー」

ワタル 「え？」

聞き覚えのありすぎる鳴き声に足元を見ると、あの黒猫がこちら

を見上げている。

ワタル「君が喋ったの？」

黒猫「そうじゃ、やっと分かったか？」

なにやら威厳のありそうと言うか、年寄りっぽいような口調で喋る黒猫は、この後のワタルのリアクションに期待しているようだった。

ワタル「へえ、喋れたんだ」

しかし、ワタルの反応は淡泊なもので、黒猫は思わずっこけた。

黒猫「な、なんじゃ、驚かんのか？」

ワタル「驚いたけど、喋る動物なら鳥や猿やカバと見てるから、そんなにはねえ」

ちなみにそれらはドアクター一味の呪いによって、姿を変えさせられたクラマや、ヒミコの父親、幻龍斎、ワタルの剣の師匠、シバラクだったりするのだが。

黒猫「鳥や猿に、なんとカバまでとは……、ワシもまだまだじゃのう」

何がまだまだなのかは分からないが、とにかく感心しているようだった。

ワタル「ところで猫さん」

黒猫「夜一、それがワシの名じゃ」

ワタル「ご、ごめんなさい。僕はワタル、戦部ワタルです」

猫相手に敬語を使うのはどうかと思ったが、夜一と名乗る黒猫からは先ほどは感じられなかった威厳のようなものを纏っていて、つい敬語を使ってしまう。

夜一「うむ、それでなんじゃ、ワタル？」

ワタル「さっき虚って言うけど、それは何ですか？」

夜一「さっきお主が倒した白い仮面をつけた怪物のことじゃ」

ワタル「あの怪物は虚というのか……」

名前を分かったのいいが、それよりも虚が神部界に来ないようにする方が重要だった。

夜一「それよりもワタル、さっきお主が言っておった創界山とは、何のことじゃ？」

ワタル「え？ 創界山を知らないの？」

夜一「うむ、そのような地名、聞いたこともない」

夜一が冗談や嘘を言っているようには見えず、ワタルは少し混乱した。

創界山は地理的にも政治的にも神部界の中心に存在し、言わば首

都のようなものである。それを知らないということは……、ワタルの頭の中に一つの仮説が浮かび上がる。

ワタル「夜一さん、ここどこ?」

今度は夜一が怪訝そうな顔をする。

夜一「西流魂街からさらに西に位置する森のじゃ」

迷子か、と言いたそうだが、今のワタルはそれどころではない。流魂街などと言うなんか縁起の悪そうな名前の街を彼は知らなかった。

ワタル「ごめん、もう少し大きな括りで教えてもらえないかな。例えば……国、の名前とか?」

この奇妙な質問に夜一も、目の前の少年の異質性に気が付いた。

夜一「ここは尸魂界ソウルソサエティという『世界』じゃ」

ワタル「やっぱり、そういうことか」

自分の推測が正しかったことをワタルは確信した。どうやら自分のはあの穴を通して違う世界に来てしまったらしい。

夜一「ワタル、どうやらお主は尸魂界の人間ではないようだが、詳しい話を聴かせてくれぬか。この穿界門がどこに繋がっておるのかも知りたいしの」

ワタル「え、え」と

ワタルは迷ったが、すぐに全てを離すことを決めた。夜一は猫だが信用できるようだし、虚のこともっと教えてもらわなければならない。だとするとこちらが情報の出し惜しみするわけにはいかない。何より、夜一の小さな体から発せられる覇気が説明を拒否することを許さなかった。

ワタル「神部界というのは、多分ことは違う世界ことです。僕はそこからやって来たんです」

神部界、創界山のことや、そこに突如現れた白い仮面の怪物たち、そして、その出現多発ポイントを調べて見つけた空間に開いた穴。その穴を通ってここに来たことを夜一に伝えた。ただ、ワタルが幾度も神部界を救った現生界からやって来た救世主であることは言わなかった。隠すつもりはなかったが、今回のこととは関係ないの省いたのだった。

夜一「ふむ、いわゆる異世界と言うやつか、にわかには信じられん」

ただの猫ではない夜一もさすがにワタルの話を、全て受け入れるのは困難のようで難しい表情をしていた。

ワタル「無理に信じなくてもいいですよ。僕としては虚とか言う怪物創界山に来ないようにしてもらえれば言い訳だから」

夜一「ふむ、それならば……」

夜一は足音を立てずに穴、穿界門に近付くいた。

夜一「はぁ！」

息吹と共に穿界門が淡いオレンジの光に包まれる。

夜一「穿界門に簡単な結界を張った。そこらの雑魚虚程度ではここ
に出入りすることはない」

ワタル「ありがとうございます！」

意外と早く問題が解決し、猫に頭を下げたワタルだったが、ふと
ある事に気付いた。

ワタル「あの……夜一さん？」

夜一「なんじゃ？」

ワタル「この穿界門に結界を張ってもらったのはいいんだけど、僕
はどうやって神部界に帰るんです？」

夜一「さっきワシが言ったことを聞いておらんかったのか？今、張
った結界は簡単なもの。時間がたてば消えてしまうようなもので、
問題が解決したわけではない。そのような状況で神部界に戻るのは、
お主も本意ではあるまい？」

ワタル「夜一さんでもこの穴、穿界門だっけ？を閉じることはでき
ないんですか？」

夜一「うむ、ワシができるのはせいぜい、一時的に行き来ができぬ
ようにすることだけじゃ」

ワタル「どうすれば完全に穿界門を閉じることができるの？」

夜一「それは護廷十三隊に頼むしかないのう」

この時、夜一の顔が人の（猫の？）悪そうに笑ったように見えたが、気のせいだということにした。

ワタル「護廷十三隊？」

夜一「まあ、尸魂界の管理組織みたいなものじゃ。このようなことにも対応してくれる」

ワタル「なら夜一さんがそこに通報してくればいいじゃないか。変なところに穴が開いていますって」

夜一「馬鹿者、ただの猫なぞ相手にしてくれるものか」

しゃべれるという時点でただの猫ではないと思けどな、などと考えたが、完全に穿界門が閉まる確信を得ないとワタルも神部界に戻れないし、この後のことを猫の夜一に任せるのも無責任だ。

ワタル「その護廷十三隊はどこにいるんですか？」

その問いに、夜一はまた謀略が成功したような笑みを浮かべた。何かどんどん深みにはまっていくような気がしたが、今さら行動方針を変更するわけにもいかなかった。

夜一「護廷十三隊は精霊廷におる。安心せい、そこまでちゃんと案内してやる」

有難い話ではあるが、なぜか素直に喜べなかった。本来、疑うと

いう属性は戦部ワタルという人格の中には、あまり含まれていない
だが。

ワタル「ありがとうございます」

それゆえにか、ワタルの礼をいうセリフは短く、抑揚にもかけて
いた。

だが、夜一はそんなことなど気にせず、誇らしげに尾を立てて歩
き始めた。

夜一「そうと決まればさっさと行くぞ」

ワタル「は、はい」

ワタルは迷いを抱えたまま夜一の後を追っていった。

そこにいたのは猫だった（後書き）

遅くとも次の話の最後のほうで一護は出てくる予定です。また、お会いしましょう。

救世主、尸魂界に行く（前書き）

お久しぶりです。相変わらずの亀更新、待ってて来る人はいるのでしょうか？

ようやく、もう一人の主人公が出てきます。ほんの少しだけですが。それでは時間と興味のある方はお読みください。

救世主、尸魂界に行く

ワタル「夜一さん、護廷十三隊ってどんな組織なの？」

夜一「後ろを歩いていたワタルは、ごく当然とも思える疑問を口にした。」

夜一「尸魂界の管理組織であり、死神を統括する組織じゃ」

ワタル「し、死神？」

夜一の口から出た思わぬ単語に、ワタルの足が止まる。

夜一「どうした？ワタル」

振り向いて問いかける夜一の声は聞こえず、ワタルの脳内では黒いフードを被り、大鎌を持った骸骨が集団で暴れまわる光景が広がっていた。

ワタル「死神にあって大丈夫なの？魂とか狩られない？」

その問いに夜一はワタルが恐れている理由がわかった。

夜一「心配無用じゃ。死神といってもお主が想像しているようなものではない。死神とは魂の輪廻を管理、守護する者での、魂を狩るようなことはせん。むしろ、それはさっきの虚がするようなことじゃ」

ワタル「虚は魂を狩る怪物で、死神はそれを守る存在ってこと？」

夜一「まあ、そんなものじゃが、虚は化け物ではない。あれも魂、魂魄であることには違いない。分かり易く言うと、虚とは悪霊のことなのじゃよ」

ワタル「へえ。じゃあ、この尸魂界ってところは、死神の世界なんだね？」

夜一「いや、ここは現世で幽世とかあの世とか呼ばれる場所、つまり死後の世界じゃよ」

ワタル「そうなんだ…」

納得しかけたところで、あることに気付く。

ワタル「あの…夜一さん？」

心なしか、ワタルの声が震えているようだった。

ワタル「今なんて？」

夜一「なんじゃ、若いくせに耳が遠いのか？ここは死後の世界と言ったんじゃ」

聞き間違いではないことを確認したワタルの顔が真っ青になった。ワタルは今、尸魂界にいる？尸魂界とは死後の世界である？死後の世界とは死んだ人が行く世界のことである？つということは、ワタルは…。

三段活的な推測を進めていったワタルは、到着したくない答えに行きついてしまった・

ワタル「つまり僕って、死んじゃったのおおおおお!？」

突然の大声に、ビクツとする夜一だが、そんなことを気にするよ
うな余裕は今のワタルにはない。

ワタル「いつ、なんで、どうして僕は死んだの!!」

夜一「これワタル、落ち着かんか」

ワタル「あの時だ。あの時の変な雲のような列車に轢かれて死んだ
んだああああ!!」

夜一「ワシの話を聞かんか!」

ワタル「女の子と付き合ったこともないのにいいいい!買ったば
かりゲームも全然やってないのよおおお!でも冬休みの宿題や
らなくてもいいから、そこだけはラッキーかもおおおおお!」

夜一「いい加減にせい!!」

混乱の極みにあるワタルに対して、ついに夜一がキレた。

ザシュッ!

ワタル「ギヤアアアアアアアア!!!」

肉を切り裂くような音とともに、ワタルの絶叫が尸魂界の青い空
に響いた。

夜一「まったくお主は、取り乱しすぎじゃ」

ワタル「ゴメンナサイ…」

お座りをしている黒猫（夜一）の前で正座をして頭を垂れるワタル。その顔には合計八本、爪で引っかかれたと思われる傷があった。

夜一「安心せい、おそらくお主はまだ死んではおらん」

ワタル「ほ、本当に？」

迷子の子犬のような目で夜一を見るワタルに、創界山を救った救世主としての威厳は全くなかった。

夜一「通常、生を終えた魂魄は死神によって魂葬されることによってこの尸魂界に送られてくる。ワタル、お主は死神に会ったか？」

魔界の王とは会ったことはあるが、死神とはあったことはないの
で、当然、ワタルの頭は左右に動いた。

夜一「であろうな。そもそも死神に会っておれば、先程のように間違ったイメージを抱いておらぬはずじゃ」

ワタル「それじゃ、僕はどういう存在なの？」

夜一「極めて珍しい例じゃが、お主は生きたままこの尸魂界にやってきたようじゃの」

ワタル「生きたままあの世に…」

背筋に冷たいものを感じながら、ワタルは左右を見渡す。これまでのどかに見えていた景色が急におどろおどろしいものになったような気がした。

そんなワタルの心境を見抜いたのか、夜一は低く笑った。

夜一「ここは魂の故郷であって、地獄ではない。そう怖がる必要はない」

ワタル「べ、別に怖がっていないよ」

夜一「そうか、では先を急ぐぞ」

強がるワタルをスルーして、夜一はさっさと歩き始めた。

ワタル「ちょ、ちょっと待ってよ」

先ほどのどこへやら、こんなところに一人にされてはたまらぬと、慌てて後を追うワタルだった。

そんなワタルの情けない声を聴きながら、夜一は先ほどの笑みは消し、深刻な表情をしていた。

夜一（ワタルが生きたままこの尸魂界に来たということは、あの穿界門には…、だとすればやはり…）

藍染の反乱が終結し、ようやく平穏を取り戻した尸魂界。だが、それは再び乱されてしまっていた。その事件に、後ろを歩く異世界から来た少年、戦部ワタルが何らかの関わりと影響を及ぼすであらうことを、夜一は確信していた。ただ、それが良い意味なのか、悪い意味でなのか、一番大切なところがわからなかった。

ワタルもわからなかった。今、目の前に立つお菓子メーカーのマークのように、片足で両腕を挙げた全長5メートルもあるかと巨大な像が、なぜ二つも並んで立っているのかが。そして、その奥にやたらと大きな煙突のついた、平屋があるのかが。

ワタル「えーと…、なんですか？このいろんな意味で大小のバランスが悪い光景は？」

さらに、二つの像の間にはでかかど『志 波 空 鶴』と書かれた横断幕までかかっていた。あれがこの家の主の生であることは、ワタルにも容易に予測できた。

夜一「ふむ、今度は空鶴愚離己像か、相変わらず感性といい、完成度いい見事なものじゃ」

ワタル「!?!? そ、そうなんですか？」

夜一の感嘆の声に、ワタルはこの世界のセンスはこれが普通なのか、間違った認識をしてしまった。

ワタル「で、ここにあの穿界門を閉めてくれる死神がいるの？」

夜一「いや、ここにいるのはワシの知己がおるのじゃ。少し用があるっての、ここに寄った」

ワタル「へえ、夜一さんの知り合い（猫の知り合いはやっぱ猫？いや、ここは意表について犬とか、まさかのネズミとか…）」

夜一「お主、なんか失礼なことを考えておらんかったか？」

意外に鋭い眼光を向けられ、ワタルは誤魔化すように両手を左右に振った。

ワタル「と、とんでもない。ただ、尸魂界に来て、初めて人に会うな〜と思って」

夜一「…まあ、そういうことにしといてやろう。ほれ、さっさと行くぞ」

幸い心の声がばれずに済み、ほっとしたワタルと夜一が、目の前の奇妙な家に向けて歩き出した。そのとき、

???「待てい！！」

不意に空中から声が聞こえてくると、二つの人影が目の前に振ってきた。咄嗟にワタルは背中登龍剣を掴む。

???「ここは志波空鶴様のご住居、招かれざる者よ、早々に立ち去れ！」

現れたのは京劇の衣装のような服をきた大柄の男二人。双子なのだろう、とてもよく似ている。おかげで左右をどちらを見ても、ス

キンヘッドに髭面という思春期の少年が見て心が弾む光景ではなかった。

夜一「ワシじゃ、金彦、銀彦」

この二人に対しても偉そうな口調で話しかけながら、夜一が進み出た。

金彦「こ、これは夜一殿」

本当に偉いようで、二人の態度が急変した。

銀彦「この者は夜一殿のお供の方でしたか」

自分じゃなくて猫がメインなんだ、と軽いショックを受けたワタルだったが、ここで口を挟んでも話がややこしくなると判断して、不満を漏らすのをぐっと我慢する。

ワタル（でも、猫に対して、殿なんてつけるなんて…、夜一さんは何者なんだ）

今さらながらに人語を解する猫、夜一の存在に疑問を抱くワタルだが、自分もそんな猫に敬称を付けていることを失念していた。

夜一「まあ、そのようなものじゃが…、空鶴はおるか？」

やはりここの家の主は空鶴という名前らしい。ワタルは自分の推測の正しさを認識したが、あそこまで堂々と名前らしきものを掲げておいて、実はまったく関係ありませんでした。などということはないだろうが。

金彦「はい、空鶴様はおられます。どうぞ、お入りください」

先ほどのワタルに対しての威圧的な態度な帰れもなく、まるで夜の一家臣であるかのように恭しいたいどで、一匹と一人を家の中へと案内した。

その家は外見も十分におかしかったが、中もそれにもましておかしかった。何せ、玄関を開けるといきなり地下に続く長い階段があるのだ。

ワタル（それなら上の家はなんなんだ？ただの飾りなのかな？）

そんなことを考えているうちに、下までたどり着いた。

金彦「少々、お待ちください」

階段のすぐそばの障子の前で金彦が主に夜一に対して言うと、障子の奥にいますであろうこの家の主に対してお伺いを立てた。

金彦「空鶴様、よろしいですか？」

空鶴「夜一が来てんだらう？さっさと通しな」

聞こえてきたのはぶっきらぼうな口調の若い女性の声だった。あんないかついオブリエを飾るような人物だから、男だろうと思っていたワタルは意外な表情をしていた。

金彦「は、はい、ただいま」

叱責したというよりも、これが彼女の常の口調なのだろうが、急

かされた金彦は慌てて障子を開き、ワタルたちを部屋の中へと通した。

空鶴「よう夜一、よく来たな」

中にいたのは声から予測できた通り、若い女性だった。頭には無造作に布を巻き、金太郎の前掛けのような赤い布で大きな胸を覆い、腰に長い布を巻いただけの、やたらと露出度の高い格好している。そして、右腕がなく隻腕であった。スタイルもいいので、この格好ならもっと色気があってもいいはずなのだが、雄々しい雰囲気のないで、そのようなものは一切感じられなかった。

夜一「ひさしぶり、という程でもないが、元気にしとったか？」

空鶴「まあな。そっちこと藍染の野郎に、手ひどくやられたって聞いたが、その時の傷はいいのか？」

夜一「あの程度、すで完治しておるわ」

ワタル（怪我って、アイゼンって猫と縄張り争いでもしたのかな？）

事情を知らないものにしてみれば、猫の喧嘩相手は猫や犬以外に思いたるものはなく、ワタルは知らないうちに尸魂界史上、最大最悪の反逆者を猫にしてしまった。異世界の人間に猫扱いされた当の本人がこれ知ればどういう顔をするか、彼をよく知る者たちにしてみれば、楽しみでもあり、恐怖でもあるだろう。

空鶴「で、そこの妙な格好をしたガキはなんだ？」

突然、話題が自分になって、ワタルは慌てて視線を挙げた。実は

今までワタルの視線は、空鶴の見事な胸、特に露出されている胸の谷間に向けられていたのだ。

ワタル「え、えっと、僕は戦部ワタル。初めまして、空鶴さん」

空鶴の格好に青少年らしい興味を抱いているのと、さっきまで胸を見ていたことに対する恥ずかしさから、自己紹介するワタルの頬は赤くなっていた。

空鶴「ほう、一護の奴より礼儀は知っているようだな」

幸いとワタルの視線のことなど気付いていないようで、旧知の誰かと比較していた。

夜一「実はこのワタルのことで頼みがあって、ここにやってきた」

空鶴「面倒事か？」

夜一「そうなる可能性は高い」

空鶴「いいぜ、話してみな。一護達の件以来、面倒事なくて暇だったからな」

夜一「うむ、実はこのワタルは、神部界という異世界からきた人間でう…」

夜一はこれまでの経緯を、ワタルの補足を受けながら説明した。

空鶴「成程…」

品定めするような空鶴の視線を受け、ワタルは背を伸ばした。

空鶴「ちよつと信じられねえ話だな、異世界だなんて」

ワタル「嘘は言っていないせん！」

思わず声を荒げる。

空鶴「うんなことはわかってるんだよ。そもそも手前程度の青二才の嘘を、夜一が見抜けぬわけがねえ。それで、夜一、おれに何をしろってんだ？」

夜一「なに、簡単なことじゃ。ワシと連名でこやつ身元保証人になってもらいたい」

それを聞いた空鶴の眉の角度がわずかに上がったが、夜一は構わず話を続けた。

夜一「先に話した通り、こやつは通常の方法を無視して尸魂界に来た。いわば旅禍じゃ。そのうち護廷隊に目をつけられるのは間違いない」

猫が貴族？と思ったワタルだが、口を挟めるような空気ではなかった。

空鶴「それで、おれとお前、没落したといえ元四大貴族の二人が身元保証人になれば、護廷隊といえどそうそう手出しはできないか…」

夜一「ああ、ワタルが尸魂界に重大な損害を与えない限りはのう」

空鶴「それが面倒事になる可能性が高いということか」

夜一「そういうことじゃ」

空鶴「わかった、いいぜ」

ほとんど考えることなく、空鶴は即答した。夜一はそれがわかっていたように満足げに頷いたが、ワタルが慌てて口を挟んだ。

ワタル「保証人なんてやめてください。僕はここで問題を起こすつもりで来たんじゃないんですから」

夜一「馬鹿者、そういう問題ではない。旅禍であること自体、問題なのじゃ。このままではお主は、何もできないまま死神に捕縛、悪ければ処刑されるぞ」

ワタル「だったら、余計に夜一さんにも、空鶴さんにも迷惑はかけられないよ」

夜一「では、お主はあの穿界門をどうやって閉じるつもりじゃ？死神から逃げ回りながら、死神に協力を仰ぐつもりか？」

ワタル「それは…」

忘れていたわけではないが、穿界門を閉じるには死神の力が必要だった。ワタルは目的を果たすにはなにがなんでも死神の協力が必要なのだ。

空鶴「ワタルとか言ったな、テメーは何しにこの尸魂界にきた？」

ワタル「それは虚が神部界に来ないようにするために…」

空鶴「だったらテメーはそのことだけ考えろ。いいな」

ワタル「で、でも…」

それでも戸惑うワタルに、空鶴はズカズカと近づくとその頭を鷲掴みにした。

空鶴「いいか、クソガキ。おれはテメーの身元保証人になることを、おれの意思で決めた。テメーに拒否権はねえ、わかったか？」

ワタル「だから、それじゃって、痛い痛い痛い！頭蓋骨が割れるうううう！」

いきなりワタルが悲鳴をあげたのは、彼の頭を掴んでいた空鶴の左手が、頭蓋骨を握り潰さんばかりの勢いで力を込めたからだ。

空鶴「ぐちぐち御託を言ってんじゃね、答えはハイ、分かりました、了解、承知のどれかにしやがれ」

ワタル「それって全部、肯定…、だから頭があああああ！！」

空鶴「さっさと言わねえと、脳をまき散らすことになるぞ」

もはや脅迫である。

ワタル「ハイ、分かりました、了解、承知、すべてお任せします、言うとおりにするから、手を離してええええ！骨伝導で骨のきしむ音が聞こえるうううう！！！！」

魔界の者の理不尽な暴力と戦ってきた救世主が、一人の女性の理不尽な暴力に屈した瞬間だった。

空鶴「まったく、手間をかけさせやがって、最初から素直になりやがれ」

ワタル「素直な気持ちを言ったなら、こうなっただけですけど…」

空鶴「てめえはそんなに自分の脳みそが何色かみたいのか？」

ワタル「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！だから頭を掴まないで！！」

空鶴に頭を掴まれたまま土下座をするワタルを見て、ちょっと不安になる夜一だった。

その晩、ワタルと夜一は、日が暮れるということもあって志波家に泊まることになった。その際、先を急ぎたいワタルが強行軍を主張したが、猫と女性の爪と握力によって説得（と書いて脅迫と読む）された。

空鶴「それで身元保証人になるのはいいが、具体的に何をすりゃいいんだ？」

ワタルをさっさと寝かせた空鶴と夜一は、酒を飲みながら話合っていた。

夜一「浮竹に書状を書いてくれ。そのあとは浮竹が総隊長殿に説明してくれるじやろう」

空鶴「分かった、今夜中に書いておくぜ」

応じながら、空鶴は自分の杯と夜一の前に置かれた杯に酒を注ぐ。

夜一「で、今回も岩鷲を付けるのか？」

空鶴「できればそうしたいんだが、あのバカ弟は別の用事で使いに出していてな、しばらくは帰ってこない。それにあいつ一人なら、お前一人で十分だろう？」

夜一「確かにの」

空鶴「それよりも、今、尸魂界に現れている虚ではない化け物どもとワタル、何か関係があるのか？」

夜一「ワタルがいた神部界という世界に、穿界門を通して尸魂界の虚が現れた。ならば、その逆もあり得るじやろう」

空鶴「その穿界門を通して、あちらの化け物がこちらに現れたっていうことか？」

夜一「そして、その穿界門は人為的に開かれた可能性が高い」

夜一はワタルが死者としてではなく、生者として尸魂界に来てい

ることを話した。

空鶴「なるほど、つまりその穿界門は喜助が一護たち用に用意したものと同じように、霊子変換機がついているのか」

夜一「うむ、穿界門が勝手に開かれる可能性は極めて低いが、ゼロではない。じゃが、その穿界門に霊子変換の機能がついている可能性はゼロじゃ」

空鶴「誰かが穿界門を開いたわけか…」

何のために、とは聞かなかった。開いた者が誰かわからない以上、憶測もできない。ただ、分かっているのは、

空鶴「尸魂界と神部界、どちらかの世界に、ありは両方に強い敵意を持っているの確かだな」

夜一「うむ、そしてワタルは今のところ、神部界の情報を持つ唯一の存在。これを失うわけにはいかん。奴には悪いが、この事件が解決するまでは尸魂界にいてもわねばな」

実は夜一の都合で尸魂界に抑留することになってしまったワタルだったが、当の本人はこの時にはすでに夢の国に旅立っていた。

翌朝、ワタルと夜一は志波邸を出立することになった。

ワタル「空鶴さん、いろいろお世話になりました」

ペコリと頭を下げるワタルの手には、昨晚、夜一との約束通り、空鶴が昨晚の間に書き上げた書状があった。

空鶴「おう、その書状を護廷十三隊、十三番隊隊長の浮竹十四郎ってのに渡しな。そうれば後は奴がいいようにしてくれるだろうよ」

ワタル「はい、わかりました」

空鶴「落とすんじゃないぞ。もし落としたら」

笑いながらワタルの頭を掴む。

空鶴「今度こそこの頭を握りつぶすからな」

ワタル「たとえば命を落としても、この手紙だけは絶対に落とさせん！」

真っ青な顔で断言するワタルだった。

夜一「では、ワタル、そろそろ行くぞ…、空鶴、世話になった。こ
とが済んだがらまた顔を出す」

空鶴「ああ、うまい酒を持って来いよ。ワタル、じゃあな」

ワタル「はい、空鶴さんもお元気で」

ワタルは挙げた手を左右に振りながら、夜一は一度だけ振り返ると志波邸を後にした。

志波邸から東に向かって歩いていくとまばらではあるが民家らしきものがちらほらと見え始め、人の姿も見えてきた。皆、時代劇に出てくる農民のような格好をしている。ワタルの姿を見ると、その恰好が珍しいのか、一瞬だけ凝視するが、すぐに家の中や物陰に隠れた。明らかにワタルを警戒していた。

ワタル「夜一さん、ここって？」

夜一「ここは郊外区、俗に流魂街と呼ばれる場所で、尸魂界に来た魂魄が初めに住むところじゃ」

ワタル「じゃあ、あの人たちは幽霊？」

夜一「幽霊というか、魂魄じゃな」

若干、顔色が青くなるワタル。今さらながらここがあの世であることを思い出していた。

ワタル「でもあの世ってこんな感じなんだ。なんか貧相だね」

夜一「流魂街は尸魂界の中で最も自由で、最も貧しい場所じゃから

な」

ワタル「自由ともかく、なんで貧しいの？っていうか、ここでも貧富さがあるの？」

ワタルの住む現生界の日本でも貧富の差が社会問題となっているのに、あの世でもそれがあるとうのは、庶民のワタルとしては面白い話ではなかった。

夜一「通常の魂魄は生前とは違い、肉体を持っておらんから腹が減るということがないし、暑い寒いもない。飯や着物を無理に買う必要がないのじゃ。ゆえに金銭を稼ぐために働くということもない」

ワタル「つまり経済活動そのものがないってこと？」

夜一「まあ、そういうことじゃ」

ワタル「それにしても、ゲームとか漫画がないのはつまらないな…」

これまでとは少し違う意味で、死ぬのが嫌になった現代っ子のワタルだった。

さらに流魂街の中を進んでいくと、民家の密集率が高くなっていたが、やはりここでは見られない格好しているワタルを警戒してか、人の姿を見ることはあまりなかった。

ワタル「なんか、ここまで警戒されるとショックだなあ。僕ってそんなに危険人物に見えるのかな」

夜一「見たことのない格好をして、武器まで背負っておるのじゃ。警戒されて仕方なからう」

ワタル「まあ、そうなんだろうけどさ」

昔、この格好で創界山を旅そしていたワタルとしては、これが受け入れられないことに少なからずショックを受けていた。

??? 「きゃあああああ!!」

ワタルの傷心を吹き飛ばすような悲鳴が聞こえてきた。

ワタル「な、なんだ？」

夜一「…また現れおったか」

ワタル「また…？」

意味深なセリフを言った夜一を見ろしたワタルだったが、質問はできなかった。少し先の曲がり角から十歳ほどの女の子と、その女の子に手を引かれる弟と思しき男の子が走ってきた。何かに追われているのか後ろばかり気にして、前方のワタルに気付いおらず、そのままぶつかってきた。

ワタル「おっと…」

ぶつかってきた少女を両腕をクッションにするように受け止めた。

女の子「あ…！」

ぶつかってようやくワタルの存在に気付いた少女が見上げる。ワタルの変わった格好に少女の目に恐怖が宿った。

ワタル「大丈夫？何があったの？」

だが、ワタルの優しげな瞳に少女から恐怖が消え、安堵の表情を浮かべる。

女の子「あ、あれ、化け物が…」

ワタル「化け物？」

女の子が自分がやってきた角を指差す。そこから二匹の化け物としか表現のしようのない者が女の子たちを追うように現れた。化け物は全身が全身が紫色の人形で、背中には蝙蝠のような皮膜の翼、口と手には鋭い牙と爪、足は猛禽類のようにものがつかめるように発達している。それは明らかに虚とは違っていた。そして、ワタルはその化け物のことを知っていた。

ワタル「そんな…、あれがどうしてここにいるんだ!？」

その化け物は、かつて創界山を襲った閻羅王という魔界の皇子が引き連れていた、魔界の者たちだった。

夜一「ワタル、どうした!？」

思わぬ再会に呆然となっていたワタルだったが、夜一の言葉に我に戻った。

ワタル「君たちは早く逃げるんだ。夜一さん、この二人をお願い！」

夜一「分かった。ほれ童ども、こっちじゃ」

ワタルの頼みを引き受けた夜一は、姉弟を連れてさっていった。
一人残ったワタルは登龍剣を抜いて、魔界の者たちを迎え撃った。

ワタル「たあああ!!」

一気に間合いを詰め、まず一匹目を袈裟懸けに切り裂く。その攻撃を隙を狙い、二匹目がワタルの頭狙い爪を振るう。その攻撃を屈んで交わしたワタルの剣が、逆に魔界の者の銅を薙いだ。

ともに致命傷を負った魔界の者は地面に付して、わずかに痙攣したのちに動きが止まると、体が光の粒となり、パズルが崩れるように消えていった。

ワタル「こいつら、こんな消えかたしたっけ？」

???「おい、お前。何もんだ!？」

記憶と一致しない魔界の者の最後を見るワタルに誰何の声がかけられた。姉弟と魔界の者が現れた曲がり角を三度見る。今度は黒い着物を着た背の高い男が立っていた。手には身の丈ほどもある馬鹿でかい出刃包丁のような刀を持っていたが、ワタルが最も印象敵だったのは、黒い着物とは対照的なほど鮮やかな、オレンジ色の頭髪だった。

ワタルは知らない。彼がつい最近、現生界を救った英雄であることを。

救世主、尸魂界に行く（後書き）

書く必要もないことは思いますが、最後にチラッと出てきたのが、もう一人の主人公です。名前もでてきませんが…。

次からは文章が短くなっても、頻繁に投稿できるようにしていきたいと思いますので、ここまで読んでくれた方、見捨てないでください。

では、次話でお会いしましょう。

救世主対死神!! (前書き)

前回のあとがきで短くしてでも、早く投稿するなどと書いていたが、プライベートのほうがいろいろと忙しく、さらに遅い投稿になってしまいました。さらに話も短いです。この作品を読んでくださる奇特な皆様、まことに申し訳ございません。

今回はサブタイ通り、戦闘がメインですが、期待はせずに読んでください。ちなみに最後の方で一護が悲惨な目にあうので、一護ファンの方はご注意ください。では、時間と興味のあるかはご覧ください。

救世主对死神!!

黒崎一護、地毛の色がオレンジ色という日本人にしては珍しい特徴をもつこの高校生は、今年の春先、ある出来事をきっかけに死神代行という極めて稀な職業に就くことになった。そして、それを契機に死神の本拠地、瀋霊廷、そこを守護する護廷十三隊の元五番隊長藍染惣右介の起こした反乱に巻き込まれた。その後、藍染が率いる死神の力を得た虚、破面達と護廷十三隊とともに戦い、激闘の末にこれを撃破。現世、尸魂界、虚圏の三界を巻き込んだ通称、藍染の反乱を終結させた。こうして、彼はいつもの平穏な生活を取り戻した。

はずだったのだが、

一護「このおおお！」

今、黒崎一護は尸魂界の流魂街にて、紫色の化け物に自身の分身共に言える巨大な出刃包丁のような斬魄刀、斬月を振り下ろした。

一護「ルキア、なんなんだこいつらは!?!」

隣で真っ白な斬魄刀、袖白雪を振るう小柄な死神の少女、朽木ル

キアに問いかける。だが、ルキアは首を横に振った。

ルキア「私にもわからん、虚でないのは確かなようだが…」

答えつつ突っ込んできた化け物の攻撃をかわし、すれ違いざまに首を切断した。

一護「人をいきなり呼び出しておいて、それかよ！」

ルキア「仕方なからう！私だってこのような者たち、今まで見たことがないのだ。今、十二番隊が調査を行っている、私たちは今できることをするのだ！」

一護「んなどを言われてもよ…！」

石田「黒崎、朽木さんを責めてもしようがないだろう！今は、口よりも手を動かせ！」

白い服に白いマントを纏い、眼鏡をかけた秀才風の少年、石田竜竜が声を荒げながら光の弓銀嶺弧雀から数十本の光の矢を空に放ち、数匹の化け物を斃す。

織姫「黒崎くん、今は流魂街の人たちを守らなきゃ」

茶色の長い髪と豊かな胸を持つ少女、井上織姫は石田の意見を支持しながら、オレンジ色の光の障壁、盾舜六花の能力の一つ、三天結盾で化け物たちの攻撃から逃げ遅れた流魂街の人々を守っていた。だが、三天結盾のない上空の死角から織姫に向かって化け物が鋭い爪を振りかざして襲いかかる。

ルキア「井上、上だ！」

いち早くそれに気付いたルキアが叫ぶが、織姫の反応が遅れて回避も防御も間に合わない。彼女の頭部に爪が振り下ろされようとしたその時、浅黒い肌をした2メートルを超す大男が、右腕に纏った赤と黒のストライプのカラーリングの鎧で、その化け物を殴り飛ばした。

茶渡「大丈夫か、井上？」

織姫「ありがとう、チャド君」

茶渡「…む」

織姫の例に、チャドこと茶渡泰寅は親指を立てて応じた。
こうして五人が奮闘し続けることによって、たくさんいた化け物も次々と数を減らしていった。

????「きやああああ！」

化け物の数が十匹を切ったとき、少女のものと思われる悲鳴が聞こえてきた。

一護「なんだ？」

一護が声が聞こえてきたほうを見ると、弟と思われる小さな男の子の手を引いた少女が、二匹の化け物に追われて逃げていた。

ルキア「一護、ここは私たちに任せて、あの姉弟を助けに行け！」

一護「分かった！…邪魔だ！！」

一護は目の前の化け物を一刀のもとに切り捨てると、急いで二人の二匹の後を追った。

姉弟が家の角を曲がり、そのあとを追いつ、化け物も角を曲がっていった。

一護「くそ！」

一護はスピードを上げてそれ続き、角を曲がった。

そこで見たのは、化け物に襲われている姉弟でなく、剣を振るって二匹の化け物を倒す、龍を模した金色の冠に青い鎧を纏った少年だった。

一護（なんだ、あいつは？死神：じゃないな。かといって流魂街の魂魄には見えないな…）

あたりを見渡してみると、あの姉弟の姿はない。見ていてもしやうがないので、警戒しながらも同じ年くらいの少年に近づいた。

一護「おい、お前、何もんだ！？」

光の粒子がはじけるように消えた化け物の最後に首をかしげている少年は、突然、声をかけられたことに驚いたように、一護のほうを見た。

突然、詰問口調で誰何されたワタルは、ムツとした表情でオレンジ頭の少年を見た。確かにこの世界の人間ではないが、あんな口調で問いただされる言われはない。

ワタル「人に名前を聞くときは、まず自分から名乗るべきだろう」

突き離すように言われたオレンジ頭の少年は、もともとあった眉間のしわがさらに深くなる。

少年「もう一度聞け？ てめえはどこ誰だ、ここで何をしてる！？」

少年の口調がさらに強く、厳しくなる。だが、ワタルは年に似合わず幾多の戦いを経験してきた歴戦の戦士。恫喝程度で縮みこむような肝は持ち合わせてはいなかった。

ワタル「ここでぼくが何者で、ここで何をしようが、それがこの法に違反していない以上、君には関係ないだろう。どうしても知りたいんまず、自分の身分を明かせよ」

自分に非がない以上、引くつもりは一切なく、自分でも生意気と思われるセリフを吐いた。

さらに機嫌の悪くなった少年の刀を持つ右手にわずかに力が入る。ワタルも抜いたままの登龍剣を持つ右手に力を入れた。

だが、少年はなんとか自制したようで、動いたのは腕ではなく口だった。

少年「おれは、黒崎一護だ」

かなり不本意そうではあったが、少年は自らの名前を名乗った。

ワタル（黒崎：一護？どっかで聞いたような…？）

そんなことを考えながらも、名乗られた以上、こちらも名乗らなければならぬ。

ワタル「ぼくは戦部ワタル、瀋霊廷ってところに行く途中だ」

差し支えないと思い目的も教えたが、瀋霊廷の名前を聞いた瞬間、黒崎一護は両目を見開いたと思うと、刀の切っ先をワタルに向けた。

一護「瀋霊廷だと！？なにをしに行くつもりだ！！」

普通に尋ねていればワタルも神部界に開いた穿界門のことを喋ったかもしれないが、相変わらずの威圧的な態度に、ワタルはそっぽを向いた。

ワタル「そこまで言う気はないね」

一護「そうかよ…」

つぶやくように言うと、一護は刀を振りかざした。

一護「なら、力尽くで聞かせてもらおうぜ」

剣呑な雰囲気にはワタルも剣を構える。その直後、不意に一護の姿が消えた。

ワタル「え！？」

咄然となるワタルだったが、危機を感じて反射的に剣を頭上にやる。直後、凄まじい衝撃を受け、ワタルは弾き飛ばされた。

一瞬のうちにワタルの眼前まで移動した一護の上段からの攻撃を受けきれなかったのだ。

身の丈ほどの刀なので、その斬撃の強さ、重さはかなりのものとは思っていたが、実際に食らってみると想像を軽く超えていた。剣を手放さなかっただけでも上出来だった。

ワタル「クソッ！」

なんとか尻餅をつくという醜態をさらすことだけは避けたが、はつきり言って状況は悪い。純粹な剣の腕は明らかに一護のほうが上だった。おまけに逃げようとしても、あの瞬間移動もどきですぐに追いつかれるのがオチである。

ワタル（このままじゃやられる、どうする？）

思案するワタルの目の前で、再び一護の姿が消える。今度は慌てることなく、登龍剣を構えて四肢に力を込めた。予測したとおりのタイミングで強い衝撃に体が震えるが、今度は弾き飛ばされることなく一護の斬撃を受け止め、鏢競り合いに持ち込めた。

一護「へえ、今度はちゃんと受け止めたんだな。けど、その程度の腕じゃおれには勝てないぜ！」

言い終えると同時にまた一護の姿が消え、鏢競り合いの相手を失ったワタルはつんのめりそうになるが、踏みとどまると、後ろに向かってバットのように登龍剣を振るった。

ガキイイイン!!

その一撃をワタルの背後に回り込んでいた一護が受け止めるが、その顔には驚きがはつきりと見て取れた。

一護「瞬歩が見えるか!?!」

ワタル「シュンポ? いきなり消える奴のことを言ってるんなら、全然見えてないよ」

一護「それならどうしておれがここに動くことが分かった?」

ワタル「こういう場合、相手の死角、たとえば背後をとるように動くのが普通だろう」

技量では及ばないが、ワタルには創界山、星界山での経験が豊富にあるので、ある程度の相手の攻撃を予測することができた。それに加えて、ワタルを甘く見ているのか、一護は瞬歩から刀を上段から振り下ろすだけの攻撃を繰り返すなど、動きが単調で比較的読みやすかった。

一護「ちっ!」

舌打ちと同時に後ろに跳び間合いを取ろうとする一護に、ワタルは鎧の中央にある黄色い逆三角形の飾りに手を当てた。飾りは一瞬光ると、鎧から外れ形状が円形状に変わった。

ワタル「フリフリアタック!」

フリスビーを投げる要領で投擲さえたフリフリこと回転龍円盤

は、鋭く回転しながら一護に向かっていった。

一護「こんな玩具！」

フリスビーのような、というかフリスビーにしか見えないものを、斬月で払いのけようとしたが、今度は一護が予想外の衝撃に驚く番だった。

ガン！

一護「何！？」

思惑通りにフリフリを弾いたのはいいが、思ったよりも強い衝撃に斬月もまた弾かれてしまった。

ワタル「でやああああ！」

弾かれた斬月ごと上半身がのけぞった一護に向い、登龍剣の切っ先を向けてワタルが突進する。

一護はなんとか上体を捻り、黒い着物、死覇装の袖の一部を切り裂かれるのを代償にかわすと、脇に和ワタルの両腕を抱え込んだ。

一護「このおおおお！！」

そのまま体勢で体格差を利用して振り回して、十分に勢いがついたところで投げ飛ばした。

地面に叩き付けられながらもワタルはすぐに立ち上がり、追撃の機会を与えなかった。

一護（腕力も速力も技量も大したことないのに、なんでこんなにや

りづらいんだ)

ワタルの力量が自分に及ばないことは、一合、刃を合わせただけで一護にはわかった。だからすぐに勝負はつくとも思っていたのだが、現実には思わぬ苦戦を強いられていた。

ワタルの知己量を見誤った、とは思わない。これまで一護が戦ってきた護廷十三隊の隊長や、破面の十刃には及ばないのは確かである。だが、ワタルは力量の不足分を策によって埋める戦い方をしていて、これまで一護が戦ったことのないタイプの相手だった。

一護(ああいう戦いかたも、あるってことかよ)

ワタルの戦いかたに感心しつつも、状況打開のために月牙天衝を放つべく斬月に霊圧を込め始めた。と、その時、対峙していたワタルの視線が、自分から逸れたのがわかった。攻撃を繰り返す絶好の機会だったが、戦闘中に相手から注意をそらすなどという初歩的はミスをするような相手でないはずだし、何より逸れた視線の先が自分の後ろに向けられていることが気になり、一護も肩越しに背後を見た。

そこには先ほど怪物に追われていた少女が立っていた。近くにあの弟らしき少年がいないところを見ると、弟だけ安全なところに避難させたのだろう。

一護「危ねえから、さっさと逃げな」

それだけ言うのと視線をワタルに戻した。この時、一護にもう少し観察力、たとえば石田雨竜のような、があれば、目の前にワタルという難敵がいなければ、一護はこの少女が自分に対して敵意を放っていることに気付き、この後の惨劇から逃げられたはずだった。

一護「行くぜ…」

ワタル「あ！」

月牙天衝を放つべく、斬月を振り上げる一護。それと同時にワタルが何かに気付きを声を上げるが、構わず斬月を振り下ろそうとする。その時、

一護「月牙天…、はう！！」

この時、ワタルは確かに聞いた。一護の奇妙な悲鳴とともに、人間の体から出るはずのない、甲高い金音、擬音語で表現すると、チーン、という音を。そして、見ていた。背後から一護に近づいた少女の右足が勢いよく跳ね上がり、股間にめり込むという、男としては筆舌に尽くし難し悲惨な光景を。

一護「……………！！」

股間を抑え、悶絶しながら崩れ落ちる一護。その横で少女は烈火のごとき怒気を放っていた。

少女「あのお兄さんは、私たちを助けてくれたんだ。お兄さんをいじめるな、バカ死神！」

さらに一護に対して蹴りを入れそうな勢いだったが、母親と思われる女性が顔を真っ青にして飛び出してくると、少女の手を引き脱兎のごとく逃げて行った。その間、呆然と事態を傍観していたワタルは、我に返ると悶絶している一護に近づいた。

ワタル「えーと、大丈夫？」

声をかけてみるが、一護の体は痙攣しており、とても無事には見なかった。ここでワタルが登龍剣を振り下ろしていれば、決着はついたのだが、とてもそんなことをする気になれず、一護のそばに跪くと、腰をトントンと叩いてやるのだった。

こうして救世主と死神の勝負は思わぬ形で幕を閉じたのだった。

救世主対死神!! (後書き)

前書き通りに一護が悲惨な目に会いましたね。一護ファンのかた申し訳ございません。これ以外に二人の勝負の決着のつけ方が思い浮かびませんでした。

ちなみに、前回から出てくる紫色の化け物は筆者のオリキャラではなく、ワタルサイドのキャラクターです。詳しいことは次回、その次ぐらしいの後書に書きますので、それをご覧ください。では、まだ見限っておられない方、次回にお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2133w/>

救世主と死神|(仮)

2012年1月9日17時47分発行